

泉大津市立図書館の質的評価の試み

－図書館協議会委員のストーリーによる図書館評価－

泉大津市立図書館協議会委員による図書館評価の公開について

図書館協議会は、図書館法第十四条に定められており、「図書館の運営に関し館長の諮問に応ずるとともに、図書館の行う図書館奉仕につき、館長に対して意見を述べる機関」です。協議会が活発に機能するためには、その委員構成が最も重要だと考え、市や周辺地域にゆかりがあり図書館について広い視点をお持ちの7名にお願いしました。事務局から報告を読み上げ、準備されたシナリオどおりに進むだけの協議会ではなく、よい図書館づくりのためには厳しいご意見もいただくことを期待しての構成です。

また、図書館のことをどのように議論しているかを多くの方に知っていただきたいと思い、図書館に来た方ならどなたでも聞いていただけるオープンセミナースペースで開催しています。聞きに行きたくなる協議会を目指すという思いを委員全員が受け入れてくださって実現したものです。

さて、開館の2021年度から動き出した泉大津市立図書館協議会は、子供たちの意見をもとに作成した「キミと、よみドキッ！（泉大津市こどもの読書活動推進計画）」をはじめ、新しい取組みも肯定的に受け止めていただき、どのようにしたら実行可能か、市民に届く情報の出し方ができるかなど、泉大津市立図書館が前に進むためのご意見をくださっています。その中で、泉大津市立図書館の活動評価を数字だけで行うのは難しいのではないかという議論ののち、ストーリーによる質的評価をいただくことになりました。とはいえ、数字による評価をまったく行わないわけではありません。数字によって見えるもの、数字でしか表せないものもあります。しかし、市民のみなさまが図書館を利用されたことで生じている様々な変化は数には表せません。そこで、図書館が市民のみなさまに何をもたらしているかを言葉にさせていただきました。図書館ホームページに公開しております従来どおりの量的評価と、今回の質的評価をもとにより良い図書館活動を目指してまいります。今回、第1弾となるストーリーによる質的評価をホームページに公開することで、多くの方に泉大津市立図書館内の風景や活動の変化を映像のように感じ取っていただけたら幸いです。

泉大津市立図書館館長 河瀬 裕子

泉大津市立図書館協議会は、2022年3月22日(火)の14時から「令和3年度第1回図書館協議会」としてその議論をスタートさせました。

第2期目の「令和6年度第2回図書館協議会」が、2024年9月17日(火)に開催された際に、2期にわたって協議をしてきた委員それぞれが、泉大津市立図書館シープラをどのように評価しているか、計量的な評価ではなく、質的な評価を「ストーリー」として表現して、図書館と市民のみなさんに向けて発信してはどうか、という意見が委員の中から出されました。

この文章は、その発意に賛同した委員が、それぞれに考えるストーリーとしての泉大津市立図書館の今と未来を率直に綴ったものです。各委員は、泉大津市立図書館の経営について「良いこと」は良いと称賛しつつ、改善すべき点やさらに目指すべき高みへの展望も示唆し、忌憚のない意見を繰り出してきました。お互いの意見をリスペクトし合う中でなされる「対話」は、委員相互のケミストリーを生み出し、より創造的で発展的な泉大津市立図書館の今と未来を提示してきたという自負をもっています。

それはひとえに、泉大津市立図書館が「聞きに行きたくなる協議会をめざします」という展望を示したことに始まりました。私たち、泉大津市立図書館協議会のメンバーは、この委員として議論することに誇りを持ち、泉大津市と市民みなさんの発展と成長、そして幸福の実現という地平を射程におきながら対話して参りました。この質的評価が、これからの泉大津市立図書館シープラの未来へとつながるストーリーとして“読まれる”ことを心から願っています。

氏名	内容	備考
阿児 雄之	社会教育関係者	東京国立博物館学芸企画部博物館情報課情報管理室長 国立文化財機構文化財活用センターデジタル資源担当室長
岡本 真	学識経験者	アカデミック・リソース・ガイド株式会社代表取締役 総務省地域情報化アドバイザー、京都芸術大学非常勤講師
澤谷 晃子	社会教育関係者	大阪市立中央図書館企画・情報担当課長
嶋田 学	学識経験者 社会教育関係者	京都橘大学文学部教授 元瀬戸内市民図書館長
高島 直子	市民公募 家庭教育の向上に資する活動を行う者	ホンノワまちライブラリー代表 図書館プログラミング講座講師
高橋 敏也	学校教育関係者	泉大津市立小津中学校校長
谷合 佳代子	社会教育関係者	大阪産業労働資料館エル・ライブラリー館長 大阪公立大学人権問題研究センター特別研究員

令和7(2025)年6月1日

泉大津市立図書館協議会委員一同

ストーリーによる泉大津市立図書館の質的評価の試み

アカデミック・リソース・ガイド株式会社 (arg) 岡本 真

1. 旧館と新館の印象の変化

シープラになる前の泉大津市立図書館をぶらりと訪ねたことがあります。たぶん 2015年の年末くらいのことでしょう。当時、所用があり、泉南地域の図書館を1駅1駅巡っていたのです。もう 10 年前の記憶ですので、ところどころ曖昧ですが、いくつか印象的覚えていることがあります。1つは典型的な文教地区の住宅地に立地する図書館であったことです。学校との物理的な距離の近さが印象的でした。2つ目は当時館内の確か2Fで館内のディスプレイをデザインし直す実験的な取り組みが行われていたことです。近隣大学の学生による取り組みだったと思います。ただ、その取り組みは志の素晴らしさは印象的でしたが、物理的な場所の制約を感じもしました。図書館の照明の照度不足の影響は大きく、学生の熱意のこもった作品も本来の輝きをもたらせてはいませんでした。そして3つ目。昔ながらの図書館の多くの共通課題ですが、図書館自体が静けさに包まれすぎ、落ち着いて本と向き合う修行の場のような雰囲気だったことを思い出します。



さてそこから 10 年の歳月が過ぎました。シープラとなった新しい泉大津市立図書館は、新旧の変化が明確です。旧館では物理的な近さの割にその存在を感じなかった中高生の姿を多く見かけます。たまに見かけるといふより、泉大津市立図書館の風景を構成する大事な要素に中高生の存在があります。

そして図書館の空間は明るさに満ちています。本棚に差す光も心地よく、ここは「ハレ」の場であると感じさせられます。時折動き回るロボットの存在等、新しい取り組みも印象的です。なによりもこの空間が強い規制ではなく、緩やかな自由で守られていると感じます。新館ではコーヒーを飲むことも自由です。友達とお菓子をつまめるコーナーもあります。とはいえ、野放図になに

をしてもいいわけではなく、ここに集まっている方々も一線を弁えている印象です。一人ひとりが自分の思いのしたいことや過ごし方をここに持ち寄りながら、同時に互いに一線を守っている場、それがいまの泉大津市立図書館なのだと言えそうです。

2. 泉大津の「モノ」と「コト」、そして「ヒト」

シープラを訪れるようになって自分のなかで大きく変わったことがあります。以前は駅前にある「おづみん」のブロンズ像をみても、羊毛の産地らしいとなんともなく思う程度でした。

しかし、シープラを初めて訪問して以来、泉大津市の見え方が変わったと感じます。理由は明らかで館内に設けられた「はじまりウォール」や「おりあみゅー」のコーナーの影響です。泉大津市の歴史、特に初代館長でもある近藤朴斎や大きな貢献をした吉田玉鳳という人物の存在は初めて知りました。特に吉田玉鳳は織物産業に大きく関わったことを知り、そこから「おりあみゅー」で展示される羊毛産業、織物産業と深く結びついた泉大津の歴史がリアリティーをもって理解できるようになりました。



泉大津のこうした「モノ」「コト」、そして「ヒト」は新館での展示なくしては発見できなかったでしょう。人気のある図書や雑誌だけでなく、泉大津というまちの歴史を伝える資料がカジュアルに展示されている身近さは博物館や郷土資料館とは異なる魅力です。その魅力がシープラのような気軽に入出りできる図書館にあるということは泉大津の大事な財産ではないでしょうか。

泉大津市立図書館ストーリー～協議会委員から見た変化～

大阪市立中央図書館 澤谷 晃子

◎図書館の職員さん

私だけが感じていることかもしれませんが、リニューアル当初に訪問した際の職員のみなさんはかなり緊張されている感じがありました。

最近は、「いい緊張感」と言いますか、利用者さんに向けた声掛けも自然だなと感じます。図書館協議会の日に早めに図書館に到着した際には、閲覧室で作業をすることがあるのですが、そういった時にも図書館の職員さんの姿を閲覧室でよく見かけます。

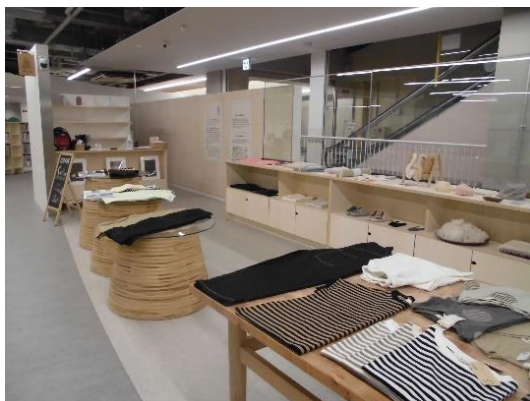
先日、子どもたちが5人くらいでわいわいとはしゃいでいました。子どもたちの近くで、声をかけるでもなく、さりげなく作業しながら見守る感じてしたが、はしゃぎすぎた子どもが椅子からずっこけたときに、その職員さんが、「ケガはないですか？」と声をかけていました。

結構にぎやかだったので、普通だったら、「そんなに騒いでいるから椅子からおちたんよ！」と言いたくなるだろうに、ごく自然にそのように接しておられて、ちょっとびっくりしました。周りの大人もそういう環境の図書館であって、そのルールの中でそれぞれの場所にいる理由を認めていく、ということなのかなと思いました。

◎泉大津が気になっていく

これは、私の変化ですが、泉大津市立図書館協議会委員になって、泉大津市のことが何かと気になるようになりました。せっかくだったら、泉大津産の〇〇を買おうかな、とか、泉大津でやっているイベントに行ってみようかなとか、流れてくるニュースなども気になります。図書館へ行ったら、ショップを必ず覗くようになりました。

先日、電車の中で泉大津市立図書館のバーコードが貼ってある本を読んでいる人を見かけ、うれしくなりました。泉大津市立図書館と関わったことからだと思うので、図書館に関わることでこういう思いをする人が増えていたらいいなと思います。



◎協議会の傍聴

図書館協議会の運営自体は、クローズドからオープンになり、また、職員のみなさんのご努力で迅速に報告が出来上がるなどどんどん進化しているように思います。ありがとうございます。

ただ、図書館協議会を傍聴する人にはあまり変化が見られないように感じました。特に、教育委員会事務局の方が、夜間の業務対応はなかなか難しいかと思うのですが、もう少し様子を見に来ていただいてもいいのでは、と思います。初めのころのほうが来られる機会が多かったかもしれません。図書館への信頼がそうになっているともいえるのですが、協議会では常に新しい議論が出ていますし、そういった状況を本庁の方も目の当たりにしておいてほしいと思います。

あと、一般の方ももう少し興味をもってきていただける工夫がいるかもしれないなと思いました。



市民の立場から見た泉大津市立図書館

市民公募委員 ホンノワまちライブラリー代表 高島 直子

泉大津市立図書館シープラが開館して早くも二年半が経過しました。私は、開館時より図書館協議会の市民委員やプログラミングワークショップの講師として関わり、図書以外の目的で図書館を訪れることも増えました。緩やかなスロープでつながった館内は、広々とし明るく開放的で、いつ訪れても気持ち良く過ごすことができます。館内を歩いていると、本を手取る人だけでなく、勉強に集中している人や、静かに仕事に向き合う人、イベントに参加している人など、一人で、親子で、友人と一緒に、さまざまな形で思い思いに時間を過ごす人々の姿が目に入ります。シープラは、単なる読書スペースを提供する施設にとどまらず、あらゆる人が心地よく過ごせる場所として、多様な過ごし方ができる場となっているのでしょう。

シープラが開館した2021年は、新型コロナウイルス感染症のパンデミックで、何度も緊急事態宣言が出された年でした。この感染症の拡大が始まって以来、私たちの生活様式は急速に変化しました。人との交流や集まる機会が制限され、対面でのコミュニケーションが減る中で、孤独感や孤立感を抱える人が増えたと言われています。そんな中で開館したシープラは、同じ目的を持つ人々が場所を共有し、自分の居場所として思い思いに過ごすことが出来る場としても大切な役割を果たしてきたのではないかと思います。

シープラが目指す図書館像として掲げる『市民が交流し、楽しみ、集い、好奇心が刺激され、新たな価値を作る創造空間』は、まさに今の時代に求められているものです。孤立しがちな現代社会において、誰にでも開かれ、ゆるやかなつながりを築ける場は、豊かで健康的な社会生活を送る上で欠かせません。シー



ープラは、人々が互いに影響を与え合い、新しい価値を共に生み出す未来の図書館の形を示していると言えます。このビジョンを実現するためには、そこに集まる市民がより主体的に関われる仕組みを築くことが不可欠です。多様な背景を持つ市民が自らのアイデアを形にし、共に創造する機会を増やすことで、シープラが本来目指す「創造空間」がさらに豊かになるのではないのでしょうか。これを具体化するために、以下の提言を行います。

◎市民団体との連携

泉大津市内には絵本や本に関わる団体や個人が複数あり、その中には前図書館で活動していた団体もあります。こういった団体の活動はシープラに引き継がれていません。シープラでは、日々さまざまなイベントが行われていますが、それらは主に図書館主催のものです。今後、シープラが本や絵本に関する専門

性を持った市民団体や個人と連携し、それぞれの活動を図書館内で展開できるような仕組みを作ることが望まれます。私自身も子どもが小さい時には、市民団体が開催する絵本の読み聞かせやイベントに参加し、子どもと一緒に絵本の世界を楽しんだ思い出があります。また、親同士の交流を通じて、子育ての悩みを共有し合える貴重な機会ともなりました。こういった活動が、図書館という公共の場と結びつくことで、さらに多くの市民にとってアクセスしやすく、より幅広い層が参加できる場になるでしょう。

加えて、図書館が市民団体や個人と協働することは、彼らの活動を支援持続可能な活動として市に根付かせる一助となるのではないのでしょうか。特に、活動の場やリソースが限られる市民団体にとって、図書館という公共施設との連携は大きなメリットです。また、図書館側にとっても、多様な市民のニーズに応えるための新たな視点やプログラムの提供が可能になります。このような協働が生まれることで、シープラが一層豊かで多彩な市民の文化活動の中心となり、地域社会全体が恩恵を受けることを期待しています。

◎シープラを中心としたまちぐるみ図書館ネットワークの構築

泉大津市では、現在、まち全体を図書館に見立てる『まちぐるみ図書館』プロジェクトを実施しています。これは、シープラを中核図書館、小学校の図書室や街中の小さなライブラリーなどを地域の図書拠点とし、市民が、いつでも、どこでも、本や学びに触れ合える読書環境を整えるものです。今年度は、この『まちぐるみ図書館』に属する拠点が共同で事業を行う予定で、私はこの『まちぐるみ図書館実行委員会』の委員長として関わっています。

今やオンラインへのハードルが限りなく下がり、何か物事を進めるためにわざわざ集まることも不要な時代ですが、『まちぐるみ図書館実行委員会』では集まって対面で交流することを大切にしています。コロナ禍を経て、私たちは人との信頼関係やつながりはオンライン上での画面やSNSでは得難いことを再認識しました。世代や活動動機、目的も様々な実行委員会の人々が‘本’という共通のワードをきっかけにゆるやかなつながりを持ち、時によっては連携しあえる関係性を築いていきたいと思っています。

私はシープラもこの『まちぐるみ図書館実行委員会』に加わっていただくことを期待しています。実行委員会では、子ども達にもっと本を読んで欲しいけど中々手を伸ばしてもらえない、といった話や、子ども達への読み聞かせにどういった本がいいのか、など本や絵本にまつわる話がたびたび出てきます。図書館職員は、子どもの本の選書や書籍の専門知識を持っており、読み聞かせや本のイベント運営などの経験も豊富です。図書館職員が『まちぐるみ図書館実行委員会』で地域で図書活動を行う市民と交流の機会を持つことは、地域の図書拠点の活動をより豊かに彩り、シープラを中心とした街全体の読書環境の充実につながると考えています。

◎シープラのイベント主催者の交流

シープラで私が関わっているプログラミングのワークショップは、家庭の経済力や環境に関わらず学べる機会を作ることを目指して行っています。その原点は、ニューヨーク公共図書館のドキュメンタリー映画、『ニューヨーク公共図書館 エクス・リブリス』の中の一シーンにあります。そこで紹介されていたのは、子ども達がロボットを使ってプログラミングを学んでいる様子でした。そこには子どもたちがデジタルテクノロジーやデジタルリテラシーの基礎的な知識を学び、未来を切り開いていく力を身につけていく姿が映し出されていました。



さらに印象に残ったのは、図書館が積極的に社会的格差の是正のために動いている姿でした。誰もが平等に学び、成長する機会が与えられることは、まさに地域社会の未来を切り開くための重要な一歩です。もちろんプログラミングなどのSTEAM教育だけでも年間数百にのぼるプログラムを提供しているニューヨーク公共図書館とシープラを同一視することは出来ません。しかし、シープラにはプログラミングのワークショップのように継続的に行われている様々なイベントがあります。

私はシープラがこれらのイベントの主催者同士をつなげ、交流の機会をつくることに期待を寄せています。交流によってアイデアやリソースを共有したり、連携による横展開も可能になるのではないのでしょうか。また、異なる分野の主催者同士の連携によって、より魅力的な体験を参加者に提供できる可能性もあります。シープラがその交流のハブとして機能することで、地域全体の学びと成長の場をさらに広げていくことを期待しています。



日々、シープラで開催されている様々なイベントは市民に学びの機会を提供し、趣向を凝らしたテーマ展示は、本との新たな出会いを誘います。今、シープラは、泉大津市の文化・知の拠点として着実に根付きつつあるのでしょう。シープラが、知識や情報を提供するだけでなく、世代や背景を超えた市民同士が自然に交流できる場として、ますます多くの人々にとって「居場所」とな

ることを心から願っています。そして、この図書館が地域社会における学びや交流、創造の核として、さらに豊かで魅力的な活動を続けていくことを、一市民としても大きな期待を持っています。シープラが泉大津市の文化の中心として未来に向けた発展を遂げていくことを見守り、これからも応援していきたいと思っています。

エピソードは架空のものですが、その内容の真実性については、河瀬館長に確認を頂きました。

1. 気が付いたら、ここにいる。繰り返される日々の中で必ず訪ねたい場所。

シープラは、なんとなく来てしまう場所であり、でも、狙いを定めて行きたい場所でもある。そこには、私が居たい場所があり、その空間に包まれる事を心地よく思える時間がある。必要もないのに眺めてしまうスマホとの接触は、ここでは少しお休みできる。ここでしか手に取ることのないガーデニングの本をめくり、いつか我が家の庭を草木で彩りたいと憧れる。

ふと目を上げると、何かに打ち込んでいる様子の誰かの背中が目に入る。その名も知らぬ中学生と思しき後ろ姿から、控えめな凛々しさを受け取り、私はなんだか嬉しくなる。

はて、と思い至り、周囲に目を馳せて見ると、そこかしこに、誰かの、かけがえのない時間が刻まれていることに気づく。一心に開かれた頁に目をやる人。カフェを渡り歩くことから解放されたノマドワーカー的背中、私の背後から聞こえてくる寝息、目標の志望校への合格を祈りたくなる真剣な横顔も見える…。

私は、私の好きな時間を過ごしつつ、誰かの大切な時間を感じ取れることが、なんだか嬉しい。自分と同じようにとは言わないけれど、それぞれのやりたいこと、やらなければいけないことに打ち込む、いや、そのような圧から逃れて、心地よく過ごせる場所として、シープラに居る人たちと、同じ時間と空間を過ごしていることを、素敵だな…と感じる私はお気楽な人間かもしれない。



でも、ここに来れば、このまちにたまたま住んでいる名も知らぬ人々と、この泉大津に暮らし合っている、いっしょに生きている、と思えるのだ。言葉も交わさないこの人たちから、私はえも言えぬ勇気とたおやかな幸せを分けてもらっている。

私にとって、そして恐らくはここに居るすべての人々にとって、泉大津市立図書館シープラは、そんな特別な場所なのだと思う。

2. 開けたことのなかった扉を押し開けて、自分の常識を広げさせてくれる場所

毛布のまち泉大津の歴史を感じながら、モフ草履づくり



モフ草履講座

時間	13:00~15:30
場所	オープンセミナースペース
定員	10名
持物	はさみ(工作用でOK) 持ち帰り袋
材料費	500円(つり銭の出ないようお願いします)
申込	前月15日~ カウンター・電話

※15日が休日の場合は16日

エスカレーターを上がり切ると、シープラのイベント告知のラインナップが目に入る。無関心ではなかったが、私に関係のある世界がそこにあるとは思っていなかった。いくつかのフライヤーに目を落とすことはあったが、あるとき初めて一枚を引き抜いた。

「毛布の縁を使った『モフ草履』を作ってみましょう~毛布のまち泉大津の歴史を感じながら、モフ草履をつくりませんか~」

成人してからこのまちにやってきた私は、知識としては知っていた「毛布のまち泉大津」について、はじめて“近寄りたい”と思った。モフ草履を作りたい、という興味と、泉大津の歴史に親しんでみたい、という知欲が、同時に私の中に沸きあがってきた。参加申し込みをするため、カウンターに赴いた私は、珍しく饒舌にこう尋ねた。「大人一人でも参加できますか」「作ったモフ草履は持ち帰れますか」「泉大津の、毛布の歴史について学べますか」

図書館の方は穏やかな笑みを浮かべてこう言った。「毛布の端がほつれてこないよう別布で包む素材で草履を作りますので、その素材を使うことで毛布のことを感じて頂ければと…。ただ、“ORIAMデジタルヒストリー”をご覧頂ければ、毛布のまち泉大津についていろいろと知って頂けると思います。」

「おりあむ・でじたる・ひすとリー…、なんですか？それ…」私はすっとんきょな声で尋ねていた。「ごめんなさい」と言わんばかりに恐縮したふうの彼は、「失礼しました。こちらにどうぞ」とカウンターの端の席に誘い、パソコンの画面を私に向けた。

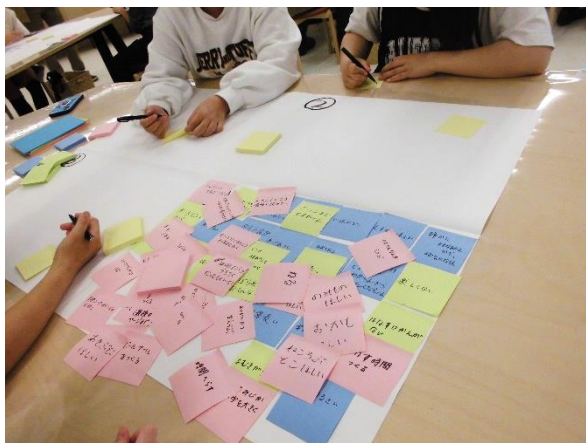


なるほど、デジタルアーカイブというものは、このように地域の産業、考古遺物から古文書に至る町の歴史の証、懐かしい地域の風景など、あらゆる泉大津の過去を写真や動画を交えて、音声や活字での解説も含めて記録する取り組みなのだ、と知った。

モフ草履でリビングに腰をおろす私は、前よりも「泉大津のひと」になった気分でくつろげた。

3. 「キミと、よみドキッ！」は、ワタシらの会話がヒントでできたんやで！

「キミと、よみドキッ！」(泉大津市こどもの読書活動推進計画)は、私たち中学生が参加したワークショップでの対話から生まれたのでした。ある日、館長さんが、「あ、その本嫌いのキミ手伝ってもらえませんか？」っていうイベントするんだけど、参加してみないって言うんで友だちと参加しました。



図書館でやってみたいこと、あれば嬉しいものとか、こんな図書館なら来たいな～ということを好きなように書いて、って言うんで書きました。

「おとまり」「合宿」「カラオケ」「アスレチック」「おかし・ジュース」「Music」「本読んだらおこずかい」「おしゃべりしたい」「眠れるスペースがほしい」「友だちと楽しく過ごしたい」「本以外にも置いてほしい」など、本当に好きなことを書かせてもらいました。

出来上がった「キミと、よみドキっ！」を見せてもらって嬉しかったのは、私たちの意見がちゃんと紹介されていたことと、マンガで分かりやすく、読むことの意味や、私たちが本から得られるものが何なのかを説明してくれていたこと。

友だちが勉強をしにシープラに来ていることは知っていたけど、本を読むことについてあまり話したことなかった。でも、マンガの説明を読んで、お兄ちゃんが楽しそうに本を読んでいる理由とか、泉大津の歴史のこととか、将来の仕事のこととか、いろいろと知ることができんだ、っていうことが分かった。私はそんなに読まないし、本が好きというほどでもないけど、友だちがシープラで一生懸命に本棚から本を取り出しては真剣な表情で見ていたときには、何を読んでいるかは気になっていました。

シープラに来たら、結構同じ学校の人と出会います。友だちというほど仲のいい人じゃないけど、なんだか同じ時間に図書館にいたことがちょっと嬉しくて「あっ、お～」って短い挨拶をすることがあります。これから本をガッツリ読む中学生になっていく、とは思いますが、シープラに来て、勉強したり本を探している友だちに出会ったりしていると、それだけでなんだか心がホッとします。自分も、勉強だけでなく、その気になればいろいろな本を読んで、いろいろなことを知ることが出来るっていう、そういう可能性みたいなものは感じられるように思います。

まあ、でも、今は来たいから来ている。図書館の人もそんな私たちを温かく迎えてくれる。自分だけの場所ではないけれど、ここは自分の場所だ、って思えるのが、シープラの良いところです。

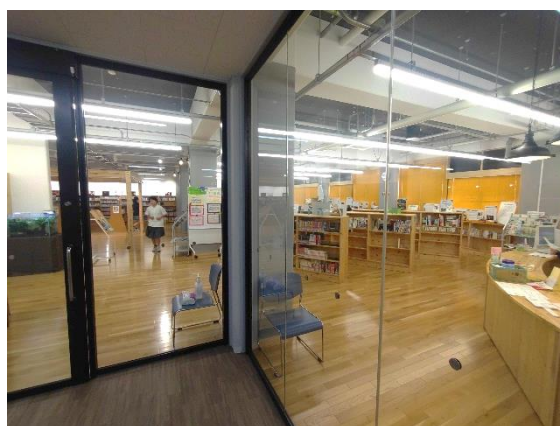
学校教育の立場からみた泉大津市立図書館

泉大津市小津中学校校長 高橋 敏也

泉大津市立図書館協議会に関わり、市立図書館に何度も伺いながら、また学校としても図書館と連動して授業の中でビブリオバトルなど様々な指導を受けながら遂行してきた。

中学生の読書離れもよく言われるが、新しい市立図書館ができたことで、そこに足を運ぶこどもも実際増えたと思っている。小津中学校のメディアセンターも図書館を兼ねているが、ここも新しくなり綺麗な環境だからこそ、こどもが利用して読書のみならず読書以外の活動も活発に行えるようになったと思っている。まずは綺麗なデザインや使いやすい配置など、様々な多機能が組み合わされていることで、読書活動自体もより進んでいくものだろうとすごく感じている。

小津中学校の場合は読書活動もちろんだが、授業の中で「調べ学習」をしたり、こどもたちの様々な活動、例えば校則改定のルールメイキングの会議の場でもメディアセンターをよく利用している。あるいは学校の方針を作るコンパスデザイナーという生徒たちがいるが、その会議でもいつも利用している。他には授業の中で「共創の授業」といって、小津中学校では探究学習をととても進めているが、調べものや小グループで活動でも利用している。



教室に行くのがしんどい子の休憩の場としても使ったりしている。憩いの喫茶コーナーというカフェスペースを作りたいというプロジェクトがこどもたちの中にあり、一角には雑誌を置いたりこたつやぬいぐるみを置いたりして、憩えるスペースとしても活用している。このように単に本を読むだけでなく、いろんな活動ができる総合的なメディアが集結した場所ということで、図書館は学校の中核になり得る場所であると考えている。



市立図書館からの学校支援や連携については、利用者データのIDを共有していて、学校で借りた本と図書館で借りた本のどちらでも返却や検索をできるようになっており、これからますます活用が深まってくると考えている。また中学校の場合は、国語の授業で読書を中心にしたような活動もあるので、そのときに図書館職員に指導に来ていただくことも進めている。

泉大津市立図書館、開館から3年の「図書館と人々の成長ストーリー」

エル・ライブラリー 谷合 佳代子

はじめに

ストーリーとして具体的な人物を設定して表現することも考えましたが、ほとんど妄想の世界のようなものができあがりそうだったので、淡々と図書館を評価することに変えました。

以下、4つの視点でシープラについて述べます。

1. 場所としての居心地のよさ、
2. デジタルアーカイブ「オリアム」の活用、
3. ビジネス支援、
4. 地域資料の展示と地場産業への目配り

1. 場所としての居心地のよさ



まずは誰もが気づく、入館した瞬間の明るさ、見通しのよさ。そして多くの閲覧席と電源席の提供。これらは長時間の居心地よい滞在を可能にして、そこに集う人々の作業効率の向上に役立っている。

一つのフロアのなかで児童コーナーと自習席と集いの場を提供するのはかなり困難なことのはずだが、シープラではそれが実現している。飲食可能なスペースがあることも人を呼び込むための工夫と言える。子どもたちの

声が響く場所と、静かに利用したい人のための閉鎖空間がうまくすみ分けられており、その真ん中あたりに公共スペースとでもいふべきイベントスペースがある。現在ではこの場所で図書館協議会も開かれており、誰もが傍聴できるようになっている。こういった配置は決して珍しいものではないが、実にうまく考えられている。

2. デジタルアーカイブ「オリアム」の活用

アクセスするたびにコンテンツが増えており、さらには最新動画も掲載されていて、そこではデジタルアーカイブ活用の実績が記録されている。作っただけで満足するのではなく、つねに活用の実態と成果に目配りすべきがデジタルアーカイブである。オリアムは地域資料のデジタル公開と地場産業の紹介が主な目的であり、それを使った教材づくりが可能となっている。図書館と博物館（市の文化財担当）との連携による地域デジタルアーカイブとしてコンパクトでよい。ただし、図書館のサイトから見つけにくいのが難点。

3. ビジネス支援

開館当初からビジネス支援を謳う図書館として注目すべき活動を行っている。ただし、利用が伸び悩んでいるのが難点で、広報の方法を再検討すべきと考える。既に行われているかもしれないが、商工会議所や市役所経済課のイベントとのタイアップはさらに工夫すべきでは。高価な帝国データバンク『会社年鑑』がそろっているのに閲覧されている様子を見たことがないのは、私が来館する時間帯の問題かもしれないが、たとえばビジネス支援資料を紹介するパネルを作ってみてはどうだろうか。

有料データベースについては費用がかかるため増やすのは難しいかもしれないが、新聞に関しては朝日新聞クロスサーチと毎索も入れてほしいところ。



4. 地域資料の展示と地場産業への目配り

貴重書、古典籍、博物資料の展示コーナーがあるのはとてもよいけれど、あまり人が見学している様子を見たことがない。時々展示ガイド（ギャラリートーク）が開催されているのだろうか。デジタルアーカイブでコンテンツが利用できるとはいえ、やはり現物が持つオーラにはかなわない。ぜひ大勢の人に地域資料に触れてほしい。

図書館内で地産商品が販売されているのも魅力の一つ。毎回私も必ずショッピングコーナーを覗いている。ここで買ったスリッパは高かったけれど最高に履き心地がよく、家族にもプレゼントした。地場産業を紹介・解説する資料があり、デジタルアーカイブがあり、商品が展示され販売されている。このサイクルをうまく回してほしいもの。

最後に

来館者数、貸出冊数、イベント数、イベント参加者数、いずれも右肩上がりの素晴らしい数字を残しているシープラで、その魅力を知った人々は必ず資料のありがたさと図書館という場所の大切さを知ることでしょう。数字を常に増加させる必要はなく、地道に伸びていけばいいし、ある程度以上は頭打ちになるのは当然のことなので、図書館員の働き甲斐と負担を天秤にかけつつ運営を続けてほしいです。成長する有機体である図書館は、そこに集う人々のつながりを育て、そこで働く人々の働き甲斐を実現してほしいもの。利用者だけではなく、図書館員にとっても働きやすく、働き続けられる場でありますように。

図書館協議会委員から見た、泉大津市立図書館（シープラ）の変容

東京国立博物館 学芸企画部 博物館情報課 情報管理室長 阿児 雄之

図書館がどのように変容してきたかについて、「ストーリー」として表現しようと試みましたが、なかなか難しいですね。ちょっとだけ、エピソード的なものを交えつつ書いてみました。そして、ちょっとした変容イメージも AI に生成してもらいました。

1. ORIAM digital history の公開と拡充

「泉大津市 ORIAM digital history」は、公開後から順次収録コンテンツ数を増やし、デジタルでの工場見学を可能とするスペシャルコンテンツも収録されるなどして、その充実が図られている。特に、泉大津市の毛布産業について知ることができるコンテンツが増えていくことは、地域資料の充実といった観点から引き続きおこなっていただきたい。そして、私もすごく楽しんで見たのですが、デジタル工場見学は、学校と企業の双方にとって価値あるコンテンツであろう。是非、このデジタル工場見学が追加されたことによって、これまでの工場見学からどのような変容が起きているかをまとめてもらいたい。

「泉大津市 ORIAM digital history」の成長が、地域産業についての教育方法を変えてきているのは明らかであろう。このような変容の伝播は、すぐに表出するものではないので、小さな変化過程を丁寧に見つけていっていただき教えていただきたい。

また、楠小学校で実施された、「泉大津市 ORIAM digital history」と「ジャパンサーチ」を活用する教材作成ワークショップは、全校の教員が参加したものであり、国内初の事例として評価されるものである。学校教育現場での利用を狙ったデジタルコンテンツを公開して終わりではなく、実際の学校現場で

試行する段階まで持っていくことは大事である。「泉大津市 ORIAM digital history」があれば、授業や学びのかたちが変わっていく訳ではない。積極的に教育のかたちをより良くしていこうという姿勢がみられた場面であると感じている。

各地域・機関でデジタルアーカイブが公開・運営されている中、泉大津市では公開・運営という枠に留まらず、「泉大津市 ORIAM digital history」の存在による周囲の変化（特に学校教育現場）が生まれている。デジタルアーカイブの評価は、その収録コンテンツの充実や利用者数が中心になることが多いが、その存在が変化を生み出した先の姿を見て、評価することも大事であろう。



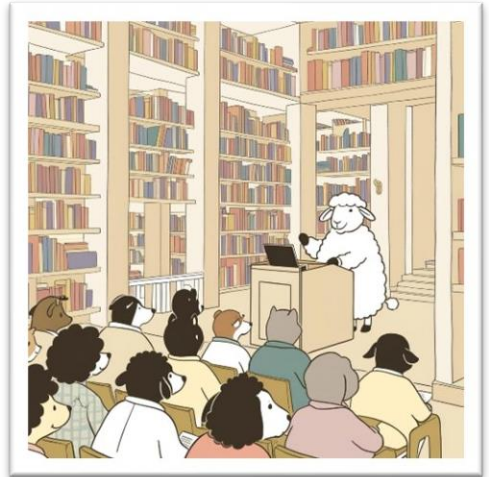
2. 積極的な共催関係構築による豊富なイベント企画

シープラのウェブサイトや、入り口掲示を見るたびに驚くのだが、日々、たくさんのイベントが開催されている。その種類は多岐にわたり、「ワークショップ」「相談会」「セミナー」「ゲーム」「おはなし会」などがあるが、これらに収まらず「その他」とされているイベントも数多くある。利用者にとって、多種のイベントがあることは実に楽しみであることは間違いないが、図書館にとっては大きな負担であるのは明らかである。

その負担に対して、図書館が中心となりつつも、多彩な共催者を探し出し、企画運営している点は、図書館運営面として、とても評価できる部分である。共催者にとっても図書館という場所、図書館を利用する人々という機会を得られる利点があるはずである。図書館イベントの在り方を変え、それに伴いイベントそのものの内容も変容してきている例ではないだろうか。

私も「地域の歴史・文化再発見講座」に講師として依頼をうけ、市民の皆さんにお話させていただいた。この講座は、人間文化研究機構「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」の協力を受けて開催されているものであり、各分野の第一線で活躍されている方々が講師として名を連ねている。

私がこの講座企画を担当し、これだけの講師の方々をお呼びして、企画運営していくことは無理だ。しかし、図書館スタッフだけでは限界のある研究者との繋がりを、このようなネットワーク事業の力を借りて築いていく取り組みは実に興味深い。他のイベントでも同様な繋がりを築いているのだと思われる。図書館が自館の中だけに留まらず、広く多様な取り組みと繋がり活動していくことは、今後の図書館を更に変容させていく下地になってきているに違いない。



3. 活動の記録とまとめへの課題

泉大津市立図書館では、数えきれない取り組みを実施している。その反動として、これまでの活動をどのように記録・継承するか。そして、これからの活動を如何にして効率良く記録し、まとめていくかが課題であろう。多くの企画や情報発信をおこなっているけれど、それらを記録として整理する方法が確立されていない様にみえる。館内での記録方針、整理方針の確立がなされていなければ、優先的に取り組んでいただきたい。



これはもちろん、館内スタッフや教育委員会にとっても重要な事項であるが、市民にとっても見過ごすことができないものである。図書館の活動が、総体としてどのようなになっているのかを、俯瞰できること、分析・評価できることを確保しなければならない。例えば、インフォグラフィックスなどの表現を活用して市民の方々にとってわかりやすいかたちでの活動まとめが必要であろう。このような活動記録の提示が、図書館自身の変容を示すものとなり、市民の方も図書館の活動に対して意見・感想を述べるようになってくると考える。

そして、方針に沿って効率的に取得・記録した統計データは、泉大津市のオープンデータとして公開するようにしていただきたい。これら統計データは、図書館活動を研究している研究者や学生にとって有意義なものになってくるだろう。その研究成果は、将来の泉大津市立図書館の姿を描いていく為に役立っていくでしょう。

<イラストについて>

イラストは Canva のドリームラボ機能を用いて自動生成。生成に用いた指示文は、次のとおりである。

1. 「学校の授業で先生が、タブレットを使って授業をしている様子の画像。生徒達も自分のタブレットを活用して授業を受けている。利用者は動物で擬人化できればいいな。先生は羊にして欲しい。生徒は羊以外の動物で。優しい色合い。淡い色合い。絵本的に。フラットな色塗り分けのイラストで。画像の中に文字は入れない。」
2. 「図書館の、書棚に囲まれた空間で講演会をしている風景の画像。講演者や参加者を動物で擬人化できればいいな。講演者は、羊が良い。優しい色合い。絵本的に。フラットな色塗り分けのイラストで。画像の中に文字は入れない。」
3. 「統計データをもとにして、インフォグラフィックスを作成しているチームの画像。作成しているチームの構成員は図書館職員。職員を動物で擬人化できればいいな。優しい色合い。絵本的に。フラットな色塗り分けのイラストで。画像の中に文字は入れない。」

泉大津市立図書館協議会からのストーリーによる質的評価を受けて

図書館「シープラ」の量的評価と質的評価について

泉大津市教育委員会 教育長 竹内 悟

教育現場では、質的評価の重要性は必ず言われてきました。しかし評価する側のフラットな視点や受験に関して対象者を平等に計る視点等で評価者の葛藤があり続けています。実際に次期学習指導要領の内容検討のために中央教育審議会や教育課程企画特別委員会などでも評価について議論されています。いまのところ学習の三観点の一つである「学びに向かう力、人間性等」は評定せずに個人内評価に変更することが議論の中心となっています。ここで図書館「シープラ」の量的評価から質的評価の変遷は本当に素晴らしい試みであると思います。

教育長としての視点と泉大津市に生まれ育って65年という市民としての視点、市内小中学校で26年間勤務した教師としての視点でストーリー的に質的評価をしてみました。

自身の学生時代から教師として図書館を含めた生涯学習施設で小・中・高校生が勉強をしている姿は本当に見たことがありませんでした。自身教えていた生徒と一緒に図書館へ調べ学習を実施するために来館しても図書館は静かに利用する場所と考えている方々から「中学生はうるさいから出ていきなさい。」「うるさくしたら教育委員会



にいうよ」などの心無い言葉を投げかけられていました。このような思いをしてきた感情はなかなか拭えません。しかし2021年に「シープラ」が開館するときに館長から様々なレクを受けて印象に残っている言葉が、今の教育でいうルールメイキングの走りとなる『図書館のルールは来場者が作る。』『図書館はサービス業です。』すなわち「自分の居



場所なんだからルールは自分たちで作りましょう」この言葉は、教育長の立場でこの図書館を作るまでのプロセスにも関わって、本当に大変な中で苦しい思いも担当者と一緒に味わいましたが、泉大津市の子どもたちの素晴らしい居場所になることを想像すると頑張る力が湧いてきました。

私も図書館「シープラ」が好きです。時間に余裕があるときに行くぐら

いで、ヘビーユーザーではありません。そのような中で「シープラ」に行くと、こどもたちの放課後の居場所づくりの一つにもなっています。勉強や読書とは程遠い子どもたちが必要とする居場所と本当に勉強や読書をしに来ているこどもたちとが入り乱れ、特に受験前になると、図書館では居場所が必要なこどもたちの様子が変わってくる。例えば、『ワァー』と騒いでいる子どもたちを目線で追ったときに、そのひとりの子と目線が交差する、その時に横に首を振るだけで静かになる。泉大津市地元の子どもたちがそのようになること自体、長い間、教師をやっているとすごい変化であると感じました。また他には受験を控えている子どもたちが、ほんとに真面目に一生懸命勉強している姿を見て、自分たちもこのままではよくないということに気づいている子もたくさん出てきています。私にとってはそれが一番です。このように自分自身で気づいて少しずつでも変化する子どもが増え続けていけば、子どもたちが大人になって、また図書館で自分が変わったことなどを話してもらえたら嬉しいです。そうすると泉大津市も素晴らしい街になると思います。